長井さんとガロに出会えて本当に良かった　東元

去年の暮、産経新聞で関西コミック作家列伝というコラムが始まるということで、ライターの中野晴行さんが取材に来られた。話はガロのことが大半だった。翌日夜、中野さんから記事の見本がＦＡＸで送られてきた。やはりガロのことが大半だった。その中でも一番嬉しかった一文がある。『85年春、２ヶ月かけて描き上げた短編をガロに持ち込み、数多くの漫画家を世に送り出した名編集長、長井勝一に認められた。』僕はこの部分を何回も何回も繰り返し読んだ。そう書いて貰ったことも嬉しかったし、何より誇らしかった。

一月の中頃、印刷された新聞が送られてきた。例の一文は、『85年春、２ヶ月かけて描き上げた短編をガロに持ち込み、数多くの漫画家を世に送り出した名編集長、長井勝一（故人）に認められた。』に変わっていた。その時長井さんの死を実感した。

僕のまわりには小さい頃から漫画家になりたかったという人が意外と多いが、僕はまったくそんな意識はなかった。京都の大学に入り、漠然と西陣織関係の仕事なんかどうかなぁ、と思っていた。本当に漠然とそう思っていただけで、西陣織のことなど何も知らなかった。

が、ある日つき合っていた友人が突然漫研に入った。そこで出した同人誌を見せてもらったが、これなら俺でも描けると思った。考えてみれば皆素人なのだから当たり前だ。そんな事がきっかけでひとつ描いてみる気になった。

三作目、老人しか出てこない漫画が完成した。セリフの部分は鉛筆で書くということは分かっていたが、タイトルや自分の名前はどうしたらいいのか分からず、自分で活字に見えるように手描きで書いた。しかしどこから見ても上手い絵とは言えない。

まてよ。ガロには、多少未熟であっても可能性のあるものは取り上げると書いてあったぞ。そうだ。ガロだ。ここでガロを思いつくあたり、僕はやっぱり漫画が、そしてガロが好きだったのだ。僕はガロが取り立てて特殊だと思っていた訳でなく、数ある雑誌の中のひとつだと思っていた。ただ個々の作家の発散するパワーというか、思い入れというか、そういうものが誌面から滲み出ていて、懐が深く眼力のある雑誌だと思っていた。御飯を食べながら読むことができなかったのを考えると、やはり別格だったのかもしれない。

ともかく、81年春、僕はその「老人天国」という作品を青林堂に送った。

来た！　ガロから返事が来た!!　どうやら長井さんの直筆だ。下宿の入口に置かれていたそのハガキを、僕は下宿の各部屋を回って見せた。そのあとすぐ大学の食堂に行き、そこでもみんなに見せた。

『前略
貴君の作品「老人天国」拝見致しました。
大変面白い作品ですので
ガロ入選させていただきます。ただ
時期は先に入選作品が二、三有り
ますので時間がかかりますが、しばらく
「ガマン」して下さい。此れからもどん
どん作品を画いて下さい。どんどん良くな
ると思います。電話かケタかったのです
が、
大赤字なので残念です。』

僕はどうやら、本気で漫画家になりたいと思った。大学を中退し、大阪で二年とちょっとアシスタントを経験した。84年暮、アシスタントを辞め久しぶりに自分の作品を描いた。はじめなぜか手が震えた。32枚を描くのに二ヶ月かかった。

85年３月４日、今度は長井さんに直接原稿を見て貰うべく上京した。階段を昇っている時心臓が爆発しそうになったが、いざ編集部に入るとウソのように収まった。白取さんに席を譲っていただき長井さんの横に座った。長井さんはトビラの名前を一目見て、「ああ、あの老人の…」と呟かれた。長井さんは覚えていて下さったのだ。

数年後、僕は長井さんに叱られた。電話でつい気弱なことを言ってしまった僕に、長井さんは「駄目だよ、やめちゃあ。ずっと描き続けなきゃ。」と激励して下さった。

今も僕はなんとか漫画を続けている。一年ほどまったく漫画の仕事がない時もあったが、やめたいとは思わなかった。絶対になんとかしてやると思った。あの長井さんの言葉を思い出すからだ。そして大事な手紙をしまってあるアルバムの一ページ目を見る。そこにはガロ入選の長井さんのハガキが貼ってある。

僕はガロ出身ということを誇りに思っている。

長井さん、お疲れ様でした。

長井さん、ありがとうございました。

長井勝一氏死去

とり・みき

これを見たまえ
あっ モーゼル・パラベラム!?

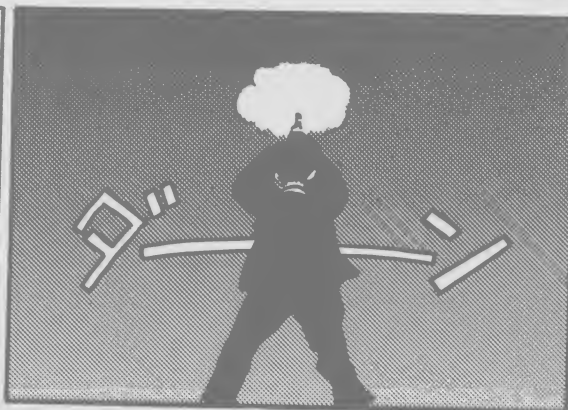
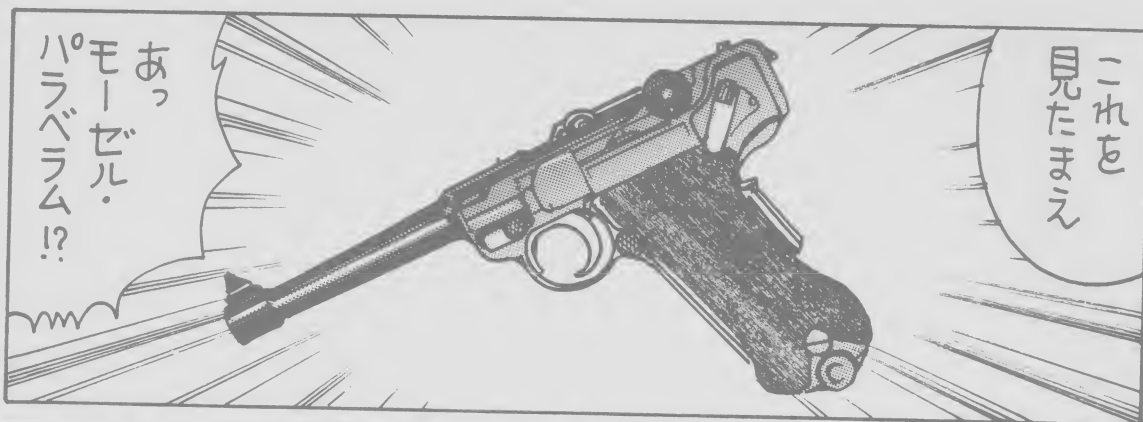
20年前私がマンガ原稿を持って青林堂に行ったとき…
そんな過去があったのか

君にはマンガ家はムリだ
これをあげるから探偵になりなさい

瞬時に私の資質を見抜き今の仕事につくようアドバイスしてくれたのが長井さんだったのだ
へー聞いてみるもんだなあ

さようなら長井さん
この一発をあなたに捧げます

ダーン

流れ弾あたり死
たまたま現場を通行中
犯人「自称探偵」を逮捕

かっちょいい長井さん

土橋とし子

私の東京ぐらしも、早いもので十一年になろうとしている。ということは、長井さんに初めてお会いしたのも約十一年前ということになるわけだ…。

一応イラストレーターになろう!!と思って和歌山から東京に出てきた私のもう一つの昔からの憧れは、漫画家になることだった。もちろん、今もなれてないけれど、無謀にも「青林堂」に持ち込むという行為に至る。上京四か月後、夏の終わりのえらく暑い日だった。噂の材木屋の二階、細く急な階段を緊張と暑さでダラダラと汗をかきながら、一段一段のぼってゆく。やっとこさドアの前まできた。えらく長く感じた。イラストの持ち込みにいくより緊張していた。部屋の中には、男の人が二人と女の人が一人、一番奥の方に写真で見たことのある長井さんの顔が見えた瞬間、また汗がドッと出た。ダラダラ汗の見苦しい私は、すごすごと長井さんの前に歩み寄り、バタバタと作品を取り出し、長井さんの机の上に置いた。手まで汗でベタベタしていた。

長井さんの席の隣に座った私は、ドキドキしながらもキョロキョロしていた。長井さんは、汗ダラダラ見苦しい私の二まわりぐらい小さい人だった。見終わるなり長井さんは、いろいろお話しして下さった。もちろんダメだった。ちょっと自信あった私にとっては、キツイお言葉であった。といっても今、思い出してみても長井さんのお言葉は、的確なものであったし、私の作品は恥ずかしいものであった。若かったのである。しかし、あの時の長井さんのお言葉は、今も心にしみている。漫画家、イラストレーターどちらにも当てはまるであろう鋭いお言葉であった。

あのひさうちさんも一回目はダメだったんだよと南伸坊さんや文子さんからもイロイロ、アドバイスしてもらったり、漫画家養成通信講座(ほとんど何もやってない!!)の先生でもあった川崎ゆきおさんからもはげまされ、心機一転、持ち込んだ作品と全く違うものを描いて再度挑戦。その記念すべき入選作品は一九八五年十一月号の『ふくろのおっちゃん』であった。その後、三回続けて載せてもらった。なんとなく自分の中で、実話漫画路線みたいなものがみつかったというわけだ。

初めてお会いした長井さんは、川崎ゆきおさんから聞いていた話のとおり、ほんとに小さい人だった。銭湯で湯船のへりにつかまっていないと浮いてきてしまうという話もうなずけた。でも、でっかい、かっちょいい人だった。長井さんに作品を見ていただき、お話もしていただき、入選作品に選んでもらえて、自分でもほんとラッキー、しあわせ者だと思っている。時々、あの時の長井さんのお話を思い出し、かみしめている。かめばかむほど味の出るお話だった。長井さんという一人の人の眼で入選作品を選ぶ、選んできたこのやり方は、他では出来ないと思う。長井さんの眼がちゃーんと『ガロ』で、長井さんが青林堂そのものだったと思う。そんな筋のとおし方、やり方が『ガロ』であり、長井さんだったのだもの。かっちょよかった。男気があった。イカしてた。残念ながら、そんなでっかい、かっちょいい長井さんとは数えるほどしかお会いする機会がなかった。その数回の中のあるパーティーでお会いした時、どこかで私の仕事を見て下さったらしく「土橋さん、この間のあの仕事、おもしろかったよォ——」とか声をかけていただいた。そんな時も、ほんとはいろいろお話したいのに緊張してしまって、ヘラヘラと「ありがとうございますう〜」というのが精一杯ってな感じ…。トホホである。今思うともっといろいろお話しとけばよかったな〜と思う。阿佐ヶ谷の方へも、何か長井さんのお好きなものでもおみやげ持って伺いたいとか勝手に思っていたのであるが、これもうかなわぬ夢である。

私の自慢は、長井さんに直接作品を見ていただけて、入選作品に選んでもらったことである。ほんとコレにつきる。ちょっとクサい言い方になってしまうけれど『出会い』ちゅうやつだ。ほんとそう思う。私にとっての11年間の東京での濃い『出会い』をした人の一人なのである。長井さんは…。

煙のごとく消えたいとおっしゃっていた長井さんは、ほんとにどこまでも長井さんなのですね。いろいろ、いっぱいありがとうございました。

心から御冥福をお祈りいたします。